

2021 September

9  
月号

# 春燈



## 安住敦の句

### 衣更へて巢鴨とげぬき地藏詣

『柿の木坂雑唱』昭和五十五年

豊島区巢鴨の中仙道沿いの街には「とげぬき地藏」で知られる高岩寺がある。本尊の延命地藏菩薩は、諸病に靈験があるとされ、多くの参拝者で賑わう。

安住敦先生は、お気に入りの白緋に着替えて出かけられ、どなたかの病を、本堂で、そして庭の地藏菩薩に水を掛けて祈願されていたのでしょうか。「衣更へて」が軽やかで美しく景を明るくし、先生の優しいお姿が目につかぶ一句です。

池上昌子

## 安住敦の句

### 鴉鳴いて第五日曜約束なし

『歴日抄』昭和四十年

昭和三十八年五月、万太郎の急逝により春燈主宰を継承した敦。俳人協会の理事も務めていた当時、毎週日曜は句会や会議など、過密なスケジュールであったに違いない。それ故に定例の予定がない第五日曜は貴重な安息日。鴉の鳴き声に安らぎつつ秋の一日を堪能した様子が窺われる。

敦は下五の字余りを得意としたが、前掲の句の字余りは緩やかに流れる余暇時間を感じさせ、ひと際効果的である。

近藤典啓

安立公彦



暮れ残る幣の白さの茅の輪かな

祭笛ふるさと今も山河あり

在りありと父の横顔まつり笛

青空の位置を違へず朴の花

送り梅雨熱海の山河暮れやらず (悼)

燈下集

○ 今井弘雄

空青し若葉のゆるる風の音

ひまはりや暑さそしらぬ顔をして

観客の誰もぬない蟬時雨

子ども等の唄つて帰る大夕焼

鳥海の嶺はるかなり稲の波

○ 片山博介

青蛙鳴けばいよいよ森蒼く

夏草や廃村を埋め墓うづめ

息ひそめ奈落の底にの蟻地獄

山盛りに匙おづおづとかき氷

船室の卓にラム酒とパナマ帽

○ 府川昭子

紫陽花の夜来るごとく変化して

明易や水の匂ひの朝の風

髪洗ふ明日ある事を疑はず

空模様を翻弄さるる梅雨の家事

更衣しても身の内軽からず

○ 瀬戸峰子

街騒を離れ高みに桐の花

桐の花一張一弛の琵琶床に

碧潭に青葉山影濃かりけり

艇庫脇漣に映え花茨

あめんぼう己が主張し水押さふ



○ 永島雅子

風纏ひ五月の土手を夫とゆく  
庭に差す強き陽射しや夏めきぬ  
ダイエツトうつかり忘れ更衣  
宇治よりの今年も届く新茶かな  
娘一家水羊羹と来りけり

○ 矢口笑子

吹き抜くる風青々と茅の輪立つ(諏訪神社五司)  
青風絵馬をはみだす「勝」の文字  
夏燕社殿の軒を憚らず  
緑蔭に祀りて親し塞の神  
霊水の千年越ゆる音涼し

○ 松山三千江

皆違ふ顔して律儀さくらんぼ  
外灯の守宮に五指のちからかな  
野外演奏会太り肉なるチェロ奏者  
梅雨の町近隣の家解体す  
ボス猫の引越してゆく梅雨最中

○ 篠原幸子

時の日ややたらに進む腕時計  
父の日の父の写真を磨きけり  
投函のひとつとき待たぬ夕立かな  
保育園の菜園小さきトマト熟る  
青くるみ見付けて背筋伸びにけり

○ 藤原若菜

懸命に今日をまはせり水澄し  
あぢさぬや想定内の医師の言  
これしきのこと驚かず梅雨の雷  
風鈴や亡き父のこと猫のこと  
釣忍袂に添ふる指白し

○ 大文字孝一

雲の峰見えぬ未来を信じけり  
念ずれば叶ふ夢あり雲の峰  
蛩や掙などなき恋の道  
形代の薄き背中を撫でにけり  
父の日の長生きせよと子の手紙

○ 和田絢子

六月や箆笥に掛くる空布巾  
すれ違ふ人や六月の風を生む  
青田波「きけわだつみの声」古び  
万葉の岬や灼けて船ひとつ  
繕はぬ心の日々や鱗雲

○ 神田恵琳

海なかの都を知らぬ夜光虫  
慰霊の日忘れめやとぞ合掌す  
竹酔日おとうと遠く尺八吹く  
ふる里は植田明りの中や今  
泉水に潤むや夏の月の影

○ 小山繁子

白壁を映す掘割花しやうぶ  
水切りの石のきらめき夏燕  
夕虹やをさなのつくる砂の山  
父と子のけふの一局蚊遣香  
青梅雨や思ひ出の夜のラ・カンパネラ

○ 小島昭夫

入梅や級友の訃が新聞に  
妙高を背に一族の田植かな  
外房やわが青春の青葉潮  
ワクチンを二回接種の夜のビール  
喜寿の日の妻と分け合ふメロンかな

○ 渡辺若菜

雨脚に傘の重たき桜桃忌  
荒梅雨や駅に善意の傘数多  
父眠るふるさと遠き草蛩  
海峡の白き灯台雲の峰  
青春の蹉跎遙かに雲の峰

○ 西岡啓子

格闘する書類一枚梅雨に入る  
十葉の樹下にひろがるさゆれかな  
男の子等の泥んこ遊び梅雨晴間  
明易し一夜泊りの永平寺  
石灰岩の白さ際立つ大夏野

○ 中村紀美子

くちなしの一花の香る夕べかな  
水巴の句くちずさみつ蚊遣香  
色白の母のおもかげ合歓の花  
印旛辺の古墳を飾る夏あざみ  
葉桜の下金次郎像しづか

○ 浅木ノエ

風五月町の名となる大櫛  
よく弾むバスの座席や谷若葉  
ハミングのひろがつてゆく水芭蕉  
生ビール呑みほすまでの黙かな  
砂時計ほどの人生大夕焼

○ 懸林喜代次

梅雨の雷チエーンを垂らす耳飾り  
緑陰や伐れば崇ると云ふ大樹  
盛装の嫁の真白き夏帽子  
曝書すや荷風百閒万太郎  
父の日や子と酌み交はすオールドパア

○ 豊谷ゆき江

跳べさうで跳べぬ川幅蛍の夜  
目の端に動く気配や夜の蜘蛛  
土砂降りの雨に疲れて濃あぢさゐ  
遠雷におののく犬を膝に抱く  
盲導犬と渡る歩道や大西日

○ 後藤眞由美

梅雨夕焼くれなゐの水脈曳きゆけり  
待ち人の黒きレースのマスクかな  
ワクチンを終へて涼しく挨拶す  
口曲げて何を思案や守宮の子  
梅雨明や糠星縫うて翼の灯

○ 川崎真樹子

紫陽花の乳房の憂さのごとき揺れ  
履歴書に姓別欄なし虹の彩  
ほつぽつと木漏れ日を吸ふ苔の花  
蛍追ひかけて鼻緒の切れさうな  
蛍追ふサハラ砂漠に星降つて

○ 木村梨花

いつの間に肩抱かれをり蛍の夜  
アマリス嫌な人には横を向き  
傘雨忌の庭のあぢさゐ白ばかり  
雨つぶひとつ夕立の来る気配かな  
亡き人を呼べば郭公声重ね

○ 河崎國代

はらからの闇より帰る蛍の夜  
百寿までと乞はれその気や朱夏の夢  
松園の美人揺らぐや青簾  
短夜や運もたらするメルヘン靴 シンドレラ  
咲き満てり足下あやふきアマリス

○ 溝越教子

何気なき言葉に勇氣夏来る  
野ぼたんの今もまぶたに濃紫  
花魁草母のおしろい懐かしや  
洋館の古井戸守るやアカンサス  
竹筒の灯りやさしや蛍狩

○ 上野進

撒水車外宮の朝は忙しげに  
啞蟬と言ふ生涯へ羽化すすむ  
天花粉心悲しくも尚長寿  
突き出され命流るる心太  
露けしや夢を反易して散歩

○ 齋藤晴夫

ひとしほの四句遅れの山桜  
春雷の近づく人を待つ間にも  
梅雨晴間松籟雨気を祓ひけり  
白雨去る潔清めし烏城  
涅槃より妻の便りか落し文

○ 石橋邦子

青蘆を渡る風あり敦の忌  
胡麻咲かす今年かぎりの畑かな  
青鬼灯の花咲く日なり猫逝けり  
辣蕪を提げて来る子や通り雨  
七月の空の青さや母の忌来

# 余言 安立公彦

夏至夕べその明るさの杯を手に

橘 正義

「夏至」、いい文字だ。読みも善い。私たちの住むこの北半球の地で、昼が最も長く、夜が最も短い日と言うことは周知の通り。今年の夏至は六月二十一日だった。

この句はしかし、そういう暦の背景を詠むだけのものではない。「夕べを残す」という言葉がある。「夜に入っても猶、夕方の趣を残す」という意味である。この句は、その「夕べ」に「夏至」が付く。中七の「その明るさの」の背景が、「夕べを残す」という微妙な時間の感覚と並立して、「杯を手に」に結ばれている。俳句の表現は奥が深い。読み過ぐすと、その句の趣も過ぎ去ってしまう。

青桐や自転車でゆく古本屋

鷹崎由未子

「青桐、自転車、古本屋」。言葉の取合せが善い。一句を口遊んでいると、若々しい感性が静かに立ち上つて来る思いがする。この中七は時間の短縮の故ではない。歩道に沿って青桐が街路樹として植えられている。夏は黄白色の五弁

の花が咲く。その歩道と並行して、今日に行く先の古本屋街があるのだ。「青桐や」の上五が、一句を善く整えている。「古本屋」には、遠い学生時代の思い出もある。古本屋が活きている。

日輪に午後の疲れや杏落つ

鈴木 直充

「日輪に午後の疲れ」が、読む人の心を打つ。初め疑惑に取り付かれ、しばしの思索の果てに、「午後の疲れ」が何となく行く手の道を開けて来る。

太陽系の中心を為す日輪、私たちはその太陽光の恵みを受けて、この地球という惑星に生を与えられているのだ。「午後の疲れ」は、その地球に住む人、そのものの疲れである。そういう宏大な時間、空間の中、今杏の落ちる姿を目前にする。「現実とは何か」を問う一句である。

出港の豪華客船青葉潮

林 紀夫

先般催された、第八回春燈神奈川支部紙上大会の秀句の一つ。「港が見える丘公園」に近い港湾に山下埠頭があり、大型客船の停泊する景を目にする。この句もその一つ。棧橋に碇泊する豪華客船。今日はその客船の出航日だ。大勢の船客、それを見送る人々の群れ。別れを交わす人びと

に、折しも出航のドラが鳴り響くのだ。この句を見ていると、そういう風景が確と目に浮かんで来るようだ。「出港の」が善く言い留めている。

一途てふ昔のありし夕端居

久保 久子

「一途」という言葉が、作者の「今」を善く包んでいる。「昔のありし」の懐旧は、その一途さの思いを、追懐のみの思いに留めない真実を帯びている。昔を回顧するほどの人生を歩いて来た人には、誰にも在ることである。

この句、そういう時を経て来た作者が、夏の夕べ縁側で涼を求めて端居をしている。夕ぐれの間を見ている内に、ふと、過ぎ来しむかしのことなどが思い出されて来るのだ。繊細な表現の中に、微動だにしない、一途さの光る句だ。

父の日や母とは長き子の電話

吉川 隆

この句を見て独り頷く人も多かるう。その人は「父」である。子にとつては、父も母も親である。しかしどの子も、父より母に馴染の思いが深い。それはまた、子を持つ親の思いとして同じである。

掲出句。今日は父の日。六月の第三日曜日だ。お子さんから掛かって来た電話を取り話す母、傍らに居る父には、その会話を吾子と分かる。しかし交替しない母。しかも今

日は父の日だ。私もこの句を見ながら、大きく頷いた。

涅槃より妻の便りか落し文

齋藤 晴夫

作者の夫人は逝去されて、いま涅槃に在る。作者は独り午後の散歩の途次だ。ふと道端に落ちている木の葉を見る。落し文だ。時鳥の落し文か、しかし作者は、その落し文の中身は、涅槃に在る妻の便りと、ひとり思うのだ。

そのひと時の心の弾みが、「涅槃より妻の便りか」に善く出ている。想像の澄んだ思いに、作者の亡き夫人への愛情が善く表れている。「落し文」という木の葉に包まれた幼虫への、先人の賢察を改めて思う。

葉桜のそよぎ抜け来る郵便車

山浦 紀子

近くの公園に咲く桜が、吹く風に天上を舞い散る風景から、はや三か月が過ぎた。落花の後は日をかざす葉桜の時期となり、一本の桜に移りゆく季節の美しさはみごとだ。

掲出句。一読気持が洗われるような清々しい思いになる。「葉桜のそよぎ」、「抜け来る郵便車」。景が鮮明である。風景のみでなく、そこを抜け来る「郵便車」という、生活の中の一景が出ているのが善い。葉桜という背景に和し、生き生きと写し出されているのは見事である。

# 当月集

安立 公彦選



○ 佐藤まさ子

雲の峰共に歩みし峠越え  
あぢさゐの色に埋もるる駅舎かな  
ほたるこい歌ふ子供の声近し  
緋目高に故郷遠く思ひけり  
帆を揚げて磯風受くるヨットかな

○ 農野憲一郎

刃研ぎ師の呼び声ひくき梅雨人かな  
豆腐屋に朝刊抛る明易し  
交番のきりりと若き夏帽子  
郭公や無改札の駅降るる人  
月涼し女房が先に湯をつかふ

○ 宮崎紗伎

青嵐両手泳がせ一輪車  
噴水や葉袋をまぶしく持ち  
濃紫陽花雫に色のなかりけり  
雲の峰風紋動くとも見えず  
亡き人へゆきつく話天の川

○ 山本泰人

色づきて梅の実あるを知りにけり  
紫陽花の夕べ浄瑠璃ながれをり  
鈴蘭灯ともれる帰路や美女柳  
短夜の一片の雨や韻をふみ  
茂りたる大樹に父を思ふ日や

○ 大谷満智子

夕焼空影絵の童話大好きで  
石蔵の宿にくつろぎ桐の花  
さ揺らぐや備前の壺の鉄線花  
風のでて雨となるらし夕風鈴  
空蟬や利那の意地の爪を立て

# 春燈の句

安立 公彦選



青りんご生まるる曾孫凛てふ名

広島 落久保万里

歩く事子に誘はるる梅雨晴間

青梅雨や見する人なく朝化粧  
梅雨寒や眉顰むる顔父ゆづり

宮城 澤田 明子

立葵廢線跡に色競ふ

夏蛙昨日も今日も鳴き通す

法難の碑文なぞるや夕蚩

愛知 後藤 大

納涼祭とは名ばかりや人少な  
孫と見るかなたの虹の消ゆるまで

雲の峰一枚岩の忠魂碑

炎天下チャペルの中の静けさよ

大阪 柿原よし子

夏蝶の吾が後先や風の道

花南天些細な事は忘れけり

即興の幼の童謡梅雨の月

東京 遠藤 レイ

精げたる米粒に似て花みかん  
甘き香に虫集まるや花みかん

木々の葉のゆるる窓辺や囁れる

出囃子に単衣衿元きりりとし(五早落帽家)

初蝶やバス降りてより道連れに

梅雨籠り地図を拡げて仮想旅

神奈川 久津摩英子

母の日や母の遺影に語りかけ

雨あがり紫陽花の鞠うつむきぬ

ひたすら走る一意専心蟻の列

神奈川 神崎 孝子

枇杷熟れて裏木戸あたり明るうす

朝戸繰る先づは見上ぐる合歡の花

青山椒摘み取る五指に香の残る